



2 第二竖坑構

炭鉱マンの昇降や機材などの搬入・搬出及び坑内の換気や排水を行うための施設です。構は、高さ18.9mの鉄製で1908(明治41)年に完成しました。坑口から坑底までの約264mを約1分間でケーシ(エレベーターのかご)が昇降していました。 国重要文化財



5 安全燈室及び浴室(旧扇風機機械室)

1905(明治38)年頃の建設当初は、扇風機を動かす機械室として利用していました。1951(昭和26)年の万田坑閉坑に伴い、安全燈室と浴室として利用してまいりました。安全燈室には、暗闇の坑内で使用する安全燈(ヘルメットに付けるランプ)の充電機が備え付けられています。 国重要文化財



7 事務所(旧扇風機室)

1914(大正3)年頃の建設当初は、坑内の換気を行う扇風機を動力とした巨大な扇風機が備え付けられた扇風機室でした。1951(昭和26)年の万田坑閉坑後から、1階を更衣室などに、2階を事務室と坑内の監視室として利用していました。 国重要文化財



4 倉庫及びポンプ室

1905(明治38)年の建設当初は、坑内の換気を行うための扇風機室でした。当時(1906年から1914年)は、扇風機を動力とする扇風機が備えられていました。その後、予備の消火器などを置くための倉庫、坑内から汲み上げられた水を送水するためのポンプ室として利用しました。 国重要文化財



1 選炭場跡

1903(明治36)年に建設された選炭場がありました。選炭機2台が備え付けられ、第一竖坑から搬出された石炭を大きさ毎などに分けていました。石炭は「貨車」に積み込まれ、三池炭鉱専用鉄道で九州鉄道万田駅(現JR荒尾駅)や三池港を経由し、国内外へと運ばれました。



10 第一竖坑坑口

採掘された石炭を地上に引き上げるための坑口で、坑底までの深さは271m。坑口の両側に立つコンクリート壁は、当時(1899年)東洋一の規模を誇った高さ30.7mの橋の基礎部分です。構は、1954(昭和29)年に北海道の三井別炭鉱に移設され再利用されました。

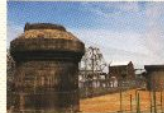


12 第二竖坑巻揚機室

1909(明治42)年に建設された2階建ての施設(機械室)です。構内にある「巻揚機」は、炭鉱マンが乗るケーシ(エレベーターのかご)を昇降させていました。また、機材の搬入・搬出を行うための「ウインチ」も設置されています。 国重要文化財

9 汽罐場跡

1898(明治31)年に建設された煉瓦造りの汽罐場がありました。汽罐場とは、石炭を燃やし蒸気を生じさせる施設で、坑内の各施設に蒸気を送っていました。最も多い時期には3箇所の汽罐場がありましたが、動力が蒸気から電気へと移っていくにつれ、規模を縮小していきました。



14 煙突

汽罐場で発生した煙を排出するための煙突です。最も多い時期には3箇所の汽罐場に対し5基の煙突がありました。1898(明治31)年に赤煉瓦約51万枚で建設された一番大きい煙突は高さ約48mで、その頂端から「赤煙突」と呼ばれ、万田坑のシンボリックな存在でした。

15 沈殿池

坑内から排水された水を一時的に溜め、不純物を沈殿させるための池です。池に取付られた排水溝から上水を河川に流す仕組みになっていました。池の面積は約3,600㎡で、護岸は切石積み(一部分は石積み無し)です。



8 職場

昭和初期に建設された職場は、木造平屋(一部壁煉瓦積み)瓦葺で建築面積が約162㎡あります。現地に今も残る遊覧やドリル類は、ベルトの付加替えによって、モーター1台で動く仕組みになっており、坑内で使う機械類の修理や、工具の

3 山ノ神祭祀施設

山ノ神祭祀施設は、万田坑で働く人の安全祈願のため、1916(大正5)年に大山祇神を分祀したものです。炭鉱マンは、入坑前に怪我をせず無事に作業を終えられるように、山ノ神の方に向かって必ず拝礼をしていました。 国重要文化財

2 万田坑正門

ここからが万田坑の国史跡区域となります。

16 桜町トンネル

1933(昭和8)年に建設された、熊本県荒尾市と福岡県大牟田市を結ぶ生活道路(地下通路)です。構内の地下を東西方向に走り、壁は切石(一部は煉瓦積み)で積まれ、入り口は幅2.7m、高さ2.4m、全長約130m、天井はコンクリートで覆われ、一部に明かり取りが設けられています。

凡例

- 国重要文化財建築物
- 現存する建築物
- 閉坑時の建築物

※ 建物名は閉坑時の名称。
() の名称は閉坑時の名称。

万田坑構内ガイド 60分コース

史跡内はもともと炭鉱の作業員のための施設ですので、係員の指示に従い、足下・頭上等充分にお気を付けてください。

- 内部見学可
- 内部見学不可

→ 見学ルート